音楽科教育法及びピアノの授業における実技試験の新たな取り組み
リコーダーWEB ライブ試験とピアノ録画試験を事例に

久原広幸（幼児保育学科），吉松遊佳（教育学部），方丈響子（教育学部），島﨑千里（本学非常勤講師）

１．はじめに

2020 年は新型コロナウイルスの感染が世界で猛威を振るった。我が国においても，ウイルス感染は全国に広がり，2020 年 4 月，2021 年 2 月の内閣総理大臣による緊急事態宣言の発令は，まさに未曾有の経験であり，現在もなおその脅威にさらされている。

教育機関においては，2020 年 2 月の全国一斉休校・緊急事態宣言下の自粛要請による休講措置などが行われ，対面授業の感染防止対策として WEB 授業の導入等が急速に進み，教育機関に新たな授業の取り組みや在り方が問われた。

このような背景により，音楽の授業においても，実施方法等を検討する必要性が生じた。そこで，新たな取り組みとして学生及び教職員に貸与されたノートパソコン（N-note）を用いて，これまでとは違う方法で試験を実施した。

本稿では，本年度の授業を振り返り，音楽科目における新たな取り組みについて報告する。

２．実技試験について

（１）これまでの実技試験

学生の成績を評価するにあたり，実技を伴う科目，殊に音楽科目においては，対面による実技試験が欠かせない。これまで音楽科教育法の評価は，筆記試験による評価と実技試験による評価を行ってきた。実技試験の内容については，学習指導要領（文部科学省，2017）「表現」領域である「歌唱」「器楽」「音楽づくり」の中から，「器楽」のリコーダー演奏を取り入れ，小学校音楽科で取り扱う指導内容を身に付けさせてきた。

ピアノの実技試験では，人前での演奏において日頃の力が発揮できるようになるため，受講者全員と指導担当教員の前で演奏する発表会形式で試験を行ってきた。将来，教員採用試験における実技試験や教壇に立つこと考えると，人前での演奏が想定されるが，それは緊張を伴うものであり，練習時と同様の演奏が本番でできないだけでなく，自身で技術面や精神面をコントロールできない状況に陥ってしまうこともある。人前で演奏する経験を積むことは，本番へ向けての事前準備方法（技術面と精神面の両方）の修得が期待できるとともに，他の学生の演奏を聴くことにより，自身の参考となり，新たな目標を得ることにもつながる。また，指導担当教員にとっては，担当以外の学生の演奏を聴くことにより，指導者自身の指導の振り返りとなる側面もあった。このような理由から発表会形式による実技試験を行ってきた。

（２）コロナ禍での新たな取り組み

「音楽科教育法Ⅰ」では，感染リスク回避の方針から，資料配信とレポート課題による WEB 授業を中心に進めた。その一方で，シラバスの計画上，リコーダーの授業と実技試験の実施方法が懸念された（文部科学省，2020）。そこで，人数を制限した対面授業を実施し，実技試験については，Microsoft Teams を活用した WEB によるライブ試験（以下，ライブ試験）を実施した（図 1）。実施方法については，予めグループ毎に試験開始時間を定め，タイムスケジュール表とともに以下の注意事項を配信した。

- 上半身（顔を含む）が映るように端末をセットし，開始 5 分前までにチームへ参加すること。
- 演奏時のみマイクとカメラをオンにし，指示があるまで退出しないこと。
- 自宅でリコーダーの音を出せない場合は，練習室（音楽館４階）を使用すること。

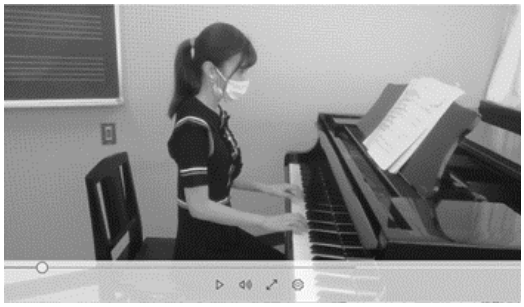
教員は，図 2 のようにライブ映像を見ながら採点し，実技試験の評価を行った。

図１　Teams によるライブ試験の様子

図 2　Teams によるライブ試験の様子

「音楽Ⅱピアノ」においては，これまで同様の対面試験は 3 密の状況となるため，それらを回避する方策として，演奏を N-note で録画し提出する方法（以下，録画試験）に変更して実施した。ピアノのレッスンを受講しているチーム（2，3 名）ごとに，各レッスン室で指導担当教員の下，演奏を録画・提出をさせた。当該科目担当講師は，提出された動画を見ながら採点を行い（図 3），指導担当教員の実技試験に対する評価と平均して実技試験の評価とした。

図 3　録画試験により提出された動画



３．アンケート調査の結果と考察

「音楽科教育法Ⅰ」は教育学部 2 年次後学期，「音楽Ⅱピアノ」は同 2 年次前学期に設置され，履修者は共通する。そこで，コロナ禍におけるこれらの新たな取り組みについて，学生がどう感じたか，今後の参考にするために次のような調査を実施した。

（1）音楽科教育法Ⅰ

「音楽科教育法Ⅰ」受講者を対象に，リコーダーのライブ試験についてのアンケート調査を実施した。

調査時期：2021 年 1 月
調査対象：「音楽教育法Ⅰ」受講者 171 名
回答数：115 名　回答率：63.7%
調査方法：学生ポータルシステムによるアンケート

図 4

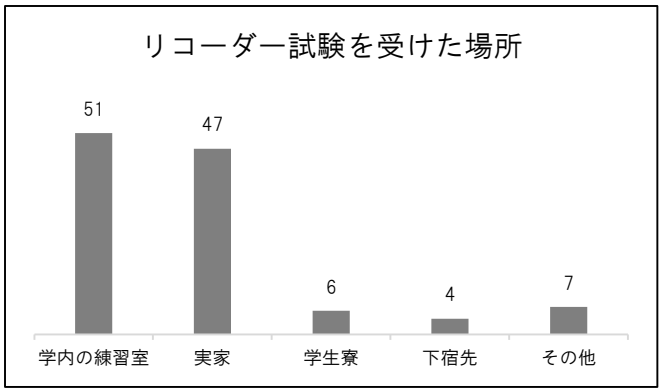


図 5

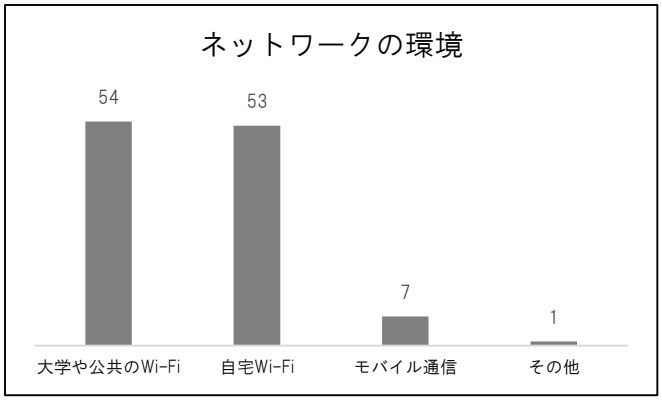


図 4 は，リコーダー試験を受けた場所，図 5 は試験を受けたネットワークの環境をそれぞれ示している。試験を受けた場所・環境は，ほとんどが学内の練習室または自宅（実家）であった。リコーダーの音を出せる環境であること，また通信環境が整っていることがその理由として推測される。

表 1

リコーダーライブ試験の良かった点（105名回答）	回答数
3密回避・感染のリスクが低い	39
試験時間が短く、時間を有効に使えた	28
緊張せずに、本来の力を出すことができた	20

表 1 は，ライブ試験の良かった点についての回答をまとめたものである。感染のリスクを回避し，安心して受験できた点が最も多い意見であった。次に，試験時間が短縮されたことで時間が有効に使えた点があげられた。具体的には「テストの説明や概要など事前に知らされていたので，テストだけをスムーズに行えた」「グループ毎に時間を指定されていて良かった」「移動時間が省け，感染リスクを回避しつつ，時間が短縮できた」などという意見もあり，コロナ禍に対応した有効な試験方法だったといえる。

表 2

リコーダーライブ試験の良くない点（96名回答）	回答数
通信環境のトラブルやPCの不具合に対する不安	39
特になし・思い当たらない	29
カメラの映り方が気になった	12

表 2 は，ライブ試験の良くない点についての回答をまとめたものである。通信環境のトラブルや機器の不具合，またそれらを懸念する声が最も多く，指が映っていないなど映り方のばらつきを指摘するものもあった。その他，「パソコンを通すと音が悪かった」「生の音を聴いてほしかった」という意見もあった。これらに関連した意見として，画像や音声のトラブルによる評価がどう判断されるのかが気になるという意見もあった。

図 6

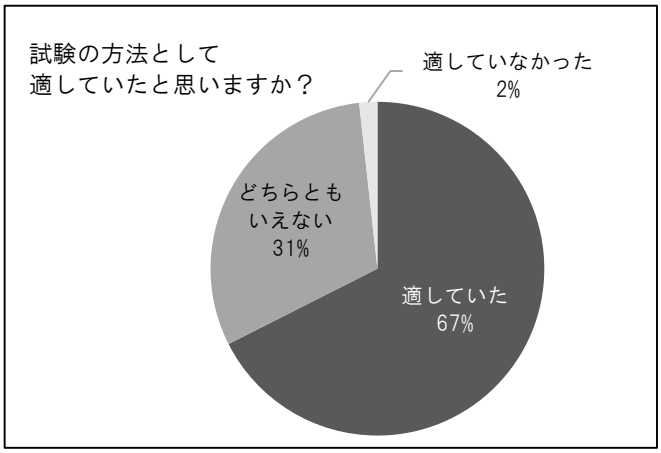


図 6 は，今回のライブ試験について，「試験の方法として適していたと思いますか？」という質問に対する回答である。結果として，「適していた」が 67%，「どちらとのいえない」が 31%，「適していなかった」が 2%という回答であった。それぞれの回答理由を表 3 に示している。

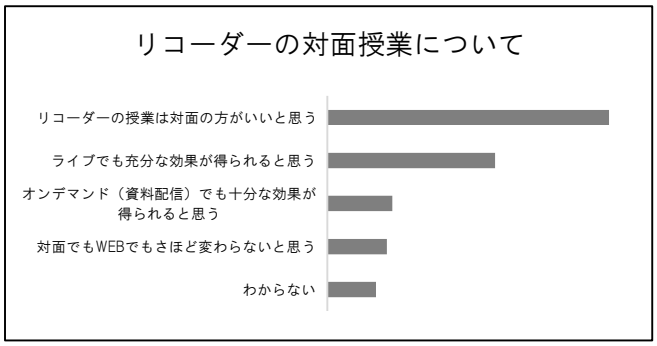
表 3

適していた（77名回答）	回答数
飛沫感染を気にせず安心して受験できた	40
対面と同じ形式で試験が行えていたから	8
グループに分けられており、時間を有効に使えた	8
どちらともいえない（35名）	**回答数**
PCの不具合や回線状況が気になるから	10
オンラインでの試験は評価に差が出そうだから	5
メリット・デメリットの両方があるから	4
適していない（2名）	**回答数**
環境(Wi-Fi等)によって差がでるから	1
全体が映っていない人がいたから	1

いずれもライブ試験の良かった点・良くない点（表 2 及び表 3）の回答と重複するが，その理由の半数以上がコロナウイルスに関連した意見であった。「どちらともいえない」と回答した 31%の学生の中には，通信環境や音質，評価に不安を抱く学生が多くみられた。しかし，マスクを外して行う試験にも関わらず感染の危険性がなかったという点で，コロナ禍で行う試験方法としてライブ試験は適していたと感じる学生は多かったようである。

２．（２）で述べたように，リコーダーの授業は対面で実施したが，入構禁止となった場合は対面で実施できない。図 7 は「リコーダーの授業が WEB となった場合，どのようなことが予想されますか？」という問いに対する結果である。

図 7



「対面の方が良いと思う」という回答が 52 名で，「合奏ができない」「音を重ねる楽しさを味わえない」「音楽は肌で感じるもの」という意見があった。また，「私は音楽が得意だから WEB でも困らないが，苦手な人は対面がいいと思う」という意見もあった。「ライブでも十分な効果が得られると思う」は 31 名で，「対面もライブもさほど変わらない」「授業方法を工夫するとライブでも十分対応できる授業内容」という意見があった。

実技を伴う音楽科目において，対面でしか学ぶことのできない知識や技術があること，また，生の音の大切さを学生が感じていることがわかった。音楽を苦手とする学生への対応，WEB 授業の工夫，生の音の大切さを伝えていくことが今後の課題である。

（２）音楽Ⅱピアノ

「音楽Ⅱピアノ」受講者を対象に，今年度の録画試験についてアンケートを行った。

調査時期：2021 年 1 月

調査対象：「音楽Ⅱピアノ」受講者 70 名

回答数：53 名　回答率：75.7%

調査方法：学生ポータルシステムによるアンケート

これまで発表会形式で試験を行ってきた経緯を述べ，今年度の録画試験について，「録画試験の良かった点」「録画試験の良くなかった点」「今後の試験方法について」自由記述による回答を求めた。

「録画試験の良かった点」についての回答（自由記述）をまとめたものが表 4 である。

表 4

録画試験の良かった点（44名回答）	回答数
3密回避・感染のリスクが低い	15
緊張せずに、落ち着いて自分の力が発揮できた	13
試験時間が短く、時間を有効に使えた	12
適度な緊張感があり良かった	8

回答として最も多かったものは「3 密回避，感染のリスクが低い」であり，感染防止対策に対して意識の高さが窺える。次いで多い回答が「緊張せず落ち着いて自分の力が発揮できた」であった。これは，授業受講時との環境の変化がない状況（いつも授業を受けている教室で，一緒に授業を受けている仲間と先生の前で録画試験を行った）であったことが起因していると思われる。また，「適度な緊張があり良かった」という回答も多くみられた。発表会形式よりも緊張感が低く，しかし適度な緊張感を持って試験に臨めたと感じているようである。

「録画試験の良くない点」についての回答をまとめたものが表 5 である。

表 5

録画試験の良くない点（45名回答）	回答数
発表会形式の試験に比べ、緊張感がない	13
特にない・思い当たらない	7
提出方法が難しい・提出に時間がかかった	6
PCの不具合やトラブルが起きたこと	4

最も多かった回答が「緊張感がない」であり，良い点として挙げた学生と同数であった。緊張する経験も大事であると思っていることが推測される。また，良くない点として挙げられた回答は，パソコンの不具合や提出方法（OneDrive へのアップロード）が多くみられた。少数であるが「人前で演奏する機会が減る」「他の人の演奏が聴けない」「録音の音がきれいではない」という回答がみられ，試験内容の質を求めている学生もいることがわかった。

「今後の試験方法について」の回答については，対面試験を望む回答が 26 であった。この中には，絶対に対面試験を希望するもの，感染予防対策をしながら対面試験を希望するもの，さまざまであったが，対面試験希望の理由として，将来を見据えて緊張に慣れる必要もあることを挙げている学生が多かった。また，少数ではあるが，WEB オンライン試験は楽器所有環境による差が生じるので対面試験の方がよいとするもの，対面試験は他の人の演奏が自身の刺激になり，曲の雰囲気を味わうことができるので良いとするものが見られた。

WEB 試験を望む回答は 17 であったが，理由としては緊張感が少ないことが最も多くみられた。しかし，人前での演奏経験も大切であると回答している学生もいた。次に多かった回答は感染リスクを懸念しているものである。その中には，本心としては対面試験を望むが，コロナ禍の状況では WEB 試験が適当であると回答している学生もいた。

対面試験を望む学生，WEB 試験を望む学生に共通にみられるものは“緊張感”であり，演奏時の緊張感に対する学生の考え方が明らかになった。

教員の意見としては，昨年度までの対面試験から録画試験への変更に対して感染予防対策や時間短縮の利点はありながらも，人前で演奏する経験が不足することの懸念や他の学生の演奏を聴くことによる振り返りができないこと（学生・教員双方とも）が多くみられた。

４．まとめ

学生へのアンケート調査や，教員間での授業に関する所感等を考察し，改善点や今後の課題が明らかとなった。コロナ禍において，感染予防対策を講じた試験としてライブ試験や録画試験は最適であったという意見があった。また，従来の対面試験と比較した場合，過度な緊張，プレッシャーがなく試験に臨むことができたことで，本来の力が発揮できたこともライブ試験と録画試験に共通していたといえる。一方で，通信トラブルや機器の不具合，音楽にとって重要な生の音の良さが味わえないことが問題となった。

今回の取り組みは，教員も学生も機器の取り扱いに慣れていなかったため生じたトラブルもあったが，これらについては今後解消が見込まれる。今後の課題として，感染対策をしつつ，生の音にこだわった試験方法について模索しなければならない。

参考文献

文部科学省（2017）小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説音楽編

文部科学省（2020）『新型コロナウイルス感染症に対応した学校再開のガイドライン』